

滋賀県湖北北部方言の命令形式について¹

脇坂美和子

京都大学大学院・mauswara57@gmail.com

キーワード：滋賀県湖北方言 命令形式 命令文 終助詞

1 はじめに

湖北方言は滋賀県湖北地方(地図1：琵琶湖の北東部、現在の長浜市、米原市)で話されている日本語の方言である。この方言は特徴的な待遇表現を持つことや、いくつかのアクセントが混在していることなどから県下でも特異な方言と位置づけられてきた(井之口1952、笥1962ほか)。中でも2006年の市町村合併以前の伊香郡、東浅井郡に当たる北部地域(おおむね姉川を境に南北に分割した北部に当たる)には、比較的古い形式や用法が保存されている場合がある。本稿ではこれを湖北北部方言と称する。この方言では地域に特徴的な形式のほか京阪方言や県内の他の方言と共通の形式も観察され、これらが形態的、統語的に異なったふるまいを示しつつ共存している。しかしその形態音韻論についての分析はほとんど行われてきていない。そこで本稿では、湖北北部方言の共時的な記述の一環として、この方言の命令形式に焦点を当てる。初めに2節において形態音韻的に多様な命令形式がどのように現れうるかを記述する。さらに、それらがどのような意味と機能を持って使い分けられているかを分析する。3節ではこれらの形式に後続する終助詞を観察し、これらが命令文に接続する際に3つのグループに分けられることを示す。4節で結論と今後の課題を述べる。



地図1：滋賀県湖北地方(脇坂2015)

¹ 本稿の執筆にあたり鈴木博之氏、山田真寛氏より多くの有益なコメントをいただいた。また植田尚樹氏、千田俊太郎先生より多くの助言をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。

この方言にはアクセントが異なる変種が現在も混在している (脇坂 2015) が、本稿で扱う変種は京阪式アクセントの一種と考えられるものでアクセント単位の初頭に高起式、低起式のアクセント型の区別をもちピッチの下がり目が弁別的な多型アクセント体系である。例文はかたかなで表記し次のとおりアクセントおよびイントネーション情報を付す。本文中の語形にも原則としてアクセント情報を付すが、アクセントに関係がない文脈で煩雑になる場合には省略している。

- ・ [は音声的なピッチの上がり目を示す²。
- ・] は音声的なピッチの下がり目を示す。
- ・ [[は高起式のアクセント型を示す。
- ・ # は低起式のアクセント型を示す。
- ・ 文末イントネーションが指定される場合は文末イントネーション境界を = で示し、上昇調下降調をそれぞれ ↑、↓ で示す。

引用先表示がある例文は、2004年に湖北北部方言を母方言とする筆者が同方言でインタビューしたデータによる。情報提供者は、湖北北部地方に言語形成期から発話時現在まで居住している2004年現在84歳の男性(以下(A)とする)、と82歳の女性(以下(B)とする)であるが、(A)は兵役のため18歳から26歳まで外地で生活している。(A)、(B)は夫婦で同時にインタビューを行っている。引用先の表示がない例文は18歳まで湖北北部地方で生活した筆者の内省による。

本文中では煩雑となるのを避けるため、禁止形やテ形複合動詞などにおいて「センデ」「スルナ」「シテクレ」のように動詞未然形を「セ」、連用形を「シ」、終止形を「スル」で代表させることがある。

2 湖北北部方言の命令文の形式

本節では、湖北北部方言の命令表現にはどのような形式が現れうるかを記述しその特徴について概観する。ここで言う命令は基本的には「相手に動作を強制する場合のムード」(益岡・田窪 1992: 118)であるが、この方言では後述するように命令形命令であっても依頼に近い機能を持つこともあり、必ずしも明示的な命令専用の形式ではない。ここでは明示的、非明示的を問わず、広く命令として認識され機能しうる形式を扱う。

2.1 先行研究

湖北方言について、滋賀県全域の方言記述の中で言及されているものとしては井之口(1952)、笥(1962)がある。いずれも滋賀県方言の全体像を簡潔に記述しており現在では既に失われた形式なども記述されているため歴史的な資料価値も高くなっている。これらにおいて湖北方言は県下でも特殊な方言と位置づけられているが、その根拠は主に京阪式とは異なるアクセントの混在と特徴的な待遇表現である。この特徴的な待遇表現については

² 後述の用例に見るように、ピッチの上がり目は複合語の形態素境界などを示すことがある。

宮治 (1987) などの研究があるが、先に述べたとおり湖北方言の命令形式について形態音韻論的に詳しく記述した研究は管見の限りでは存在しない。井之口らの研究においても湖北方言への言及は部分的なものに留まり、また既に半世紀以上が経過していることから、この方言の共時的な分析にあたっては、その前提となる現状に即した記述が求められるところである。本稿では湖北方言の中でも、地理的な事情などによって近年の共通語や京阪方言の影響による画一化が遅れたと見られる北部方言のうち、京阪式アクセントを持つ変種(脇坂 2015)を資料としその命令形式について記述を試みる。

2.2 命令形命令

湖北北部方言の動詞の命令形は男女ともに使用され、直接的な命令を示す。丁寧さの度合いや男女差は主として後続の待遇表現を示す接辞や終助詞およびイントネーションに標示される。この方言に特徴的な点として、命令形が単独で使われる場合に、ぞんざいなニュアンスが希薄である点が挙げられる。近隣の京阪方言と比較すると、たとえば森山 (1999) には京都市方言の命令形について「女性の発話としては、目下の人相手でも、「入れ」などとはかなり言いにくい。」(森山 1999 : 43) といった制限や語末のイントネーションについて「共通語でも京都市方言でも、常体の裸の命令形は上昇できない。」(同書 : 45) といった制約が存在することが記述されている。しかしこれらの記述は湖北北部方言には該当しない。この方言では命令形単独の形態は女性の発話としても許容され、語末に上昇調のイントネーションが可能である。この二点は関連しており、命令形単独の発話がまったく男女差なしに現れるのではなく、女性については文脈によっては上昇調イントネーションを伴った命令形命令のほうが下降調の命令形よりも許容されやすい。この点に関しては、次に見る連用形命令との関連で次節で検討する。表 1 に動詞の活用型とその命令形を示す。

表 1 : 湖北北部方言動詞の命令形

活用	終止形	命令形語幹	命令形接辞	アクセントパターン
五段	読む #yo[m-u]	#yo[m-	-e	アクセント型とモーラ数による(表 2)
一段	起きる #oki-[ru]	#o[ki]yo ³	-2 型
サ変	する [[su-ru	[[se]-	-e	
		[[si-]yo	
カ変	くる #ku-[ru]	[[ko]-	-i	
クレ	くれる [[kure-ru	[[ku]r-	-e	0 型
		#oku[r-	-e	

³ 後述のとおり、終止形が低起式 2 モーラの動詞でも命令形接辞の前では核を取る。そのため命令形の語頭は高起式になる。

以下 0 型は核なし、-2 型、-3 型はそれぞれ語末から 2 モーラ目、3 モーラ目にアクセント核があることを示す。サ行変格活用 (サ変)、カ行変格活用 (カ変) のほかに、動詞[[クレルは、一段活用型の活用をするが已然形と命令形において一段動詞と異なる [[クレ (已然形)、[[ク]レ (命令形) という活用形を取り、命令形にのみ丁寧さを示す接頭辞「オ」が付いた #オク[レがある。接尾辞のヨ (以下 -yo とする) は必ず直前に核を取るので]-yo と表記し、変格活用の下がり目は語彙的な核とみなして語幹に] を付ける形とした。

五段動詞は 子音語幹に命令形接辞の -e を取り、アクセントパターンは下記の表 2 のように語頭のアクセント型 (低起式・高起式) とモーラ数によって決まる。一段動詞と変格動詞は原則として-2 型である。一段動詞は母音語幹に命令形接辞の -yo を取り、アクセント型やモーラ数に関わらず -yo の直前のモーラにアクセントを取る。サ変は [[セ]ーであるが [[シ]ヨという一段動詞型の変異もあり終助詞が付かない命令形単独では[[セ]ーが優勢である。カ変は [[コ]イである。動詞 [[クレルの命令形は上述のとおり[[ク]レとなるが、接頭辞のオが付く命令形の#オク[レは低起式でアクセントは核なしの 0 型になる。五段動詞の語頭の式とモーラ数によるアクセントパターンを表 2 に示す。

表 2：湖北北部方言五段動詞の命令形アクセント

語頭の	モー	アクセントパターン	例
低起式	2	0 型	#to[re 取れ
	3,4	-2 型	#a[so]be 遊べ #haki[da]se 吐き出せ
	5 以上	複合語の後部要素が 2 モーラなら-2 型、それ以外は-3 型	#aruki[to]ose 歩き通せ #aruki[ki]re 歩ききれ
高起式	2	-2 型	[[i]ne 往ね (帰れ)
	3	-3 型	[[ka]ere 帰れ
	4	複合語の後部要素が 3 モーラなら-3 型、ただし形態素境界が認識されない場合は-2 型 ⁴ 。それ以外は-2 型	[[miya]bure 見破れ [[miyabu]re [[hatara]ke 働け
	5 以上	複合語の後部要素が 2 モーラなら-2 型、それ以外は-3 型	[[tatakida]se 叩き出せ [[tatakika]ese 叩き返せ

次にそれぞれの活用型の例を見る。上述のとおり命令形命令はこの方言ではジェンダーなどの観点からは比較的中立的な表現形式であるが、直接的な命令であるため近親者や子供に対して用いることが多い。(1)、(2) は五段動詞の命令形である。

⁴ 同一話者でもゆれがある。

- (1) [[イヤ]ナラ [[オ]ケ⁵
嫌なら捨て措け(嫌だというなら勝手にしなさい)
- (2) #ワタシワ [[シラン]シ #オ[ジ]ーチャンニ #カイテ[モ]ラエ (B)
私は知らないのでおじいちゃんに描いてもらいなさい

(1) は子供が好き嫌いを言って食べ物を嫌がった時などに用いられる。(2) はインタビュー時に話題に出ている祭事の食卓の様子について図示を依頼した筆者に (B) の女性が返事をしている場面である。女性が命令形命令を単独で使用している例であるが、この発話では語末イントネーションは上昇調にはなっていない。その場合でもこの女性から見て筆者が孫のような親しく低い待遇関係にあるために許容される。

一段動詞は (3) のように接尾辞の **-yo** を取る。また (4) のように、終止形が低起式2モーラの#ミ[ル、#デ[ル]であっても命令形接辞の **-yo** の前ではアクセント核を取るため、語頭は高起式になる(脇坂 2015)。

- (3) [[ハ]ヨ #オ[キ]ヨ

早くおきろ

- (4) [[ハ]ヨ [[デ]ヨ

早く出ろ

この方言では、一段活用型の命令形の接尾辞と全ての活用型の意向形の接尾辞が同じ分節音の **-yo** になるが、一段動詞の命令形は直前にアクセント核を取るのに対して意向形は原則として語幹に高いピッチで接続するため、アクセントによって弁別できる。

サ変には上述のとおり[[セ]ーのほかに[[シ]ヨがあるが[[シ]ヨは単独では現れにくく (6) のように終助詞を伴って現れることが多い。カ変は (7) のように命令形は[[コ]イになる。ただし筧 (1962) には「湖北では「コーエ」[koi → koé → ko:é]の形がある。」(筧 1962 : 181) という記述があり、これは現在も観察されることがある。この方言では /oi/ が /e:/ となる例は見られず、「細い」/hosoi/~/hosoe/、「樋」/toi/~/toe/ など /oi/~/oe/ の交替が現れる場合がある。

- (5) [[ハ]ヨ [[セ]ー / ? [[シ]ヨ

早くしろ

- (6) [[ハ]ヨ [[セ]ーイヤ / [[シ]ヨイヤ

早くしろよ

⁵ この表現と同様の意味で決まり文句として「嫌ならオケソクもったいない」という囃しことばもある。オケソクはこの地域に多い浄土真宗用語の華足(けそく)で仏前に供える餅などを指す。捨て措けの意味の「措け」と「オケソク」を掛けたもの。

(7) [[ハ]ヨ [[コ]イ

早く来い

動詞[[クレルの命令形[[ク]レとこれに丁寧さを示す接頭辞のオが付いた#オク[レ、さらにこれらが連用形に後続する接続助詞のテに付いて複合動詞として使われるシテクレ、シトクレ (<シテオクレ) は、2015年現在でおおよそ70代以上の高齢層では男女を問わず極めて生産的である。テ形複合動詞となる場合は、シテクレに関しては形態音韻的な切れ目の位置がシテ・クレ、とシ・テクレ、の二通りに捉えられるため、命令形アクセントにもゆれがあり、-2型のシテク]レと、-3型のシテ]クレ (動詞が低起式であればシテ[ク]レ/シ[テ]クレ) の双方が許容される。シトクレについては、これがシテオクレに由来することは、双方の形式が自由変異に近い形で現れうる⁶ことから明らかであるため形態音韻的な切れ目はシ・トクレのみで、-2型の*シトク]レは存在しない。二重母音が融合した後もオクレの低起式が残った形の[[シ]トクレと、トクレが一つの接辞として認識され、-3型となる[[シト]クレ (動詞が低起式であれば#シ[ト]クレ) の二通りになる。しかし若年層ではオクレ、トクレは著しく衰退し、クレ、テクレに集約している。(8)の子守唄はこの地域に伝承されてきたものであるが若年層に伝えられているかは不明である。(歌なので例文の表記はひらがなにシアクセント表記はつけない。)

(8) (子守唄) うちの○○はよい子でござる、みんなよい子と呼んでおくれ

次の(9)は、昔は叱られて家から閉め出されて泣いている子が多かったという話で、(10)は集落の頼母子講(たのもしこう)⁷の掛け金を払えないので待ってもらうように区長に掛け合いに行ったという話である。

(9) #コラエ[テ]クレ、#コラエ[テ]クレー [[チュ]ーテ [[ヨ]ー [[ナイテル [[コーガ [[ギョ]ーサン #アッ[タ]ガナ (A)

許してくれ、許してくれと言ってよく泣いている子がたくさんいたではないか

(10) [[ク]チャーサン [[ト]コエ [[ス]マン [[ケ]ンド #モー [[チョ]イト #マッ[ト]クレー #ゼニ[ガ] #ナ[イ]ンヤ [[チュ]ーテ [[コトワリニ [[イッタン]⁸ヤテ (A)

区長さんの所へ、すまないけれどもうちちょっと待ってください、お金がないのですと言って、断りに行ったということだ

⁶ 現在ではシテオクレの形式は廃れつつあり若年層では見られなくなっている。しかしその場合でもこれらの形式が同じ意味であることは直観的に認識していると考えられる。

⁷ 集落で行われていた無尽講で、加入者から掛け金が集められて抽選などで順にまとまった金額を手にできるしくみ。

⁸ この方言では撥音も核を担う。

(9) は、20 世紀前半ぐらいまでの親の権威が強かった時代を想定した子供から親への発話であり (10) も当時の社会階層を反映して区長が社会的に地位の高い存在であった時代の発話で、いずれもここでは話者から見て待遇価の高い相手に対して命令形を単独で使用している例である。これは命令形単独の発話が必ずしも丁寧さに欠けるぞんざいな表現ではないことを示している。双方ともに直接引用の形式であり⁹、命令形命令が実質的には依頼として機能する場合があることがわかる。(10) では待遇価が高い区長に対してトクレが使われている。このことは、クレ、テクレに接頭辞オが付いた形のオクレ、トクレは、クレ、テクレよりも丁寧なニュアンスがあることを示している。(10) の「マツクレ」を現代共通語に訳す場合は「待っておくれ」ではなく「待ってください」に近い。しかし上述のとおりオクレ、トクレの形式そのものが衰退しつつあるため、この丁寧さの差異も現在では消滅しつつある。

以上が湖北北部方言の命令形命令の形式である。次に連用形命令について見る。

2.3 連用形命令

連用形命令は動詞の連用形を命令に用いる形式で、京阪方言においては広く観察されている(森山 1999、牧野 2009 ほか)。井之口 (1952) はこれを連用命令法と称し、以下のように述べている。

普通の命令の他に、たとえば「買イー」(「お買い」の意)、見一(「お見」の意)のように、動詞の連用形を、親しい間柄または同輩以下に対する親愛的な命令をあらわすのに用いる。なお上方ではこの連用命令法を近世後期以降用いている。

(井之口 1952 : 42)

この井之口の観察は、現在の湖北北部方言にも適用できる。本稿ではこの連用形の後に何も付かない形式を命令形命令に対して連用形命令と呼ぶ。

湖北北部方言の命令形命令が京阪方言での用法とは話者の分布が異なっていた点に対応して、この形式にも京阪方言とは異なる話者の分布が見られる。連用形命令はたとえば大阪市方言では「日常的な行為指示場面で男女ともに使用される。」(牧野 2009 : 79) とあるのに対して湖北北部においては、小さい子供に話しかける場合などを除いては主に女性が使用する形式である¹⁰。この対照を表 3 に示す。京阪方言では、より直接的な命令形命令をほぼ男性のみが使うことによって標示されるジェンダー差が、湖北北部方言では、より「親愛的」ないし間接的な連用形命令をほぼ女性のみが使うことによって標示されている。

⁹ 明示的に直接引用を示す形式があるのではないが、文末に長母音が現れている(コラエテクレー、マツクレ)ことや、声色を使っていることなどにより判断される。

¹⁰ 筆者の観察では、湖北方言でも南部では連用形命令が北部よりも広く普及しており使用頻度も高く男性にも使う人が多いと見られる。また、北部でも若年層では分布が異なる可能性がある。ただし定量的なデータはないので詳しい調査は今後の課題としたい。

ただし、この方言では命令形命令の語末を長母音化し上昇調のイントネーションにすることにより命令形の直接的なニュアンスを緩和できる。このような上昇調イントネーションを伴う命令形は女性に使用されることが多い。

表 3：命令形命令と連用形命令の使用者の男女別分布

	湖北北部方言	京都市・大阪市方言
命令形命令	男女共に使用	ほぼ男性のみ
連用形命令	ほぼ女性のみ	男女共に使用

連用形が 1 モーラになる一段動詞については、湖北北部方言では内容語には最小性制約が働くため、上に引用した井之口 (1952) にも見られるとおり、連用形命令は長母音で現れる。アクセントは活用型に関わらず語頭の式により、高起式であれば (11) のように平板に、低起式であれば (12) のように連用形接辞の -i または -e を含むモーラの前でピッチが上昇する。

- (11) #コッチ [[キー
こっちへおいで
- (12) #ク[ス]リ #ノ[ミ
薬をのみなさい～薬をのんでね

動詞 [[クレルは連用形と命令形がともにクレという形式を取るが、アクセントを考慮に入れると現れるのは命令形のみで連用形命令の用法は見られない。すなわち、[[クレルの連用形は [[ク]レテ、[[クレナガラのように高起式であるので、もし連用形命令が現れるとするならば、アクセントは (13) のように平板になるはずである。しかし実際には (14) のように-2 型の命令形アクセントの形式しか現れない。

- (13) *#ワタシ[ニ]モ[[クレ
私にもくれ
- (14) #ワタシ[ニ]モ[[ク]レ
私にもくれ

しかしテ形複合動詞においては、(15) - (18) のような例が観察される。

- (15) [[チョ]ット[[ミテク]レ/[ミテ]クレ
ちょっと見てくれ
- (16) [チョ]ット[[ミテ]ク[レ
ちょっと見てくださいな

(17) [[チョ]ツト[[ミ]トクレ/[[[ミト]クレ

ちょっと見てくださいな

(18) [[チョ]ツト[[ミ]トク[レ/[[[ミト]ク[レ

ちょっと見てくださいな

(15) は命令形命令で、これまでに見たように形態音韻的な区切りをとミテ・クレと捉えるかミ・テクレと捉えるかによって二通りのアクセントがありうる。(16) はこれまで見てきたアクセントパターンによれば、クレが低起式であってさらにミテとクレの間に音韻的な区切りがあれば連用形命令と考えられる。しかし [[クレルの連用形 [[クレは上述のとおり高起式であって低起式ではない。可能性として考えられることは、このクレは、接頭辞のオが付いた低起式の #オク[レのオが脱落した形式ではないかということである。2.2 で見たように、オクレ、トクレの形式は、クレ、テクレよりも丁寧なニュアンスがある。そのため、命令形よりも丁寧なニュアンスを持つ連用形命令にはクレ、テクレは使用されず、オクレ、トクレ (<テオクレ) が使用されたと考えるとアクセントパターンに合致する。テ形複合動詞のテオクレ (teokure) には eo の母音連続のうち、e が落ちる場合と o が落ちる場合があり、後者の場合に母音の o は落ちてでもアクセント単位境界での低起式が残り、連用形命令のシテ#オク[レ → シテ]ク[レの形式になったと考えることができる。e が落ちる場合は命令形命令は (17) に、連用形命令は (18) になる。(16) は (18) の変異と考えることができる。なお (18) の例のうち (16) に対応するのは [[ミト]クレの形式のみで、(18) の [[ミ]トク[レに対応する*[[ミ]テク[レという形式は存在しない。ここでは形態的には融合している複合語においてアクセント単位の境界が残っているものと仮定している。しかしもしアクセント単位が新しく形成されたとするならば、1 つのアクセント単位にピッチの山が 2 か所存在することになる。この点については、今後この方言のアクセント体系の中で統一的な説明を与えなければならない。

(19) はアクセントパターンは (18) と同じで、昔、生活が苦しい上出 (かみで、山間部) の人々が山で柴を拾って平野部の方へ売りに行った時の話題である。連用形命令が依頼として機能している。

(19) #シバ[オ #オ[一]テ #ドー[カ [[コー]トク[レ [[チュ]ーテ #モツテカ[[ハル #ワ
[ケ]ヤ (A)

柴を背負って どうか買ってくださいなと言って 持っていかれる訳だ

森山 (1999) は京都市方言において「何もつかない連用形をゼロ連用形命令、「テ」による連用形の命令をテ形命令と呼び、両者を連用形命令として一括したい」(森山 1999 : 42) とし、この双方について「直接的な依頼を表す」(同上) としている。湖北北部方言においては、テの後に何も付かないテ形命令は高齢層ではあまり見られず、これまでに見た

テクレ・トクレの形式を取るほうが一般的である。しかし 2015 年現在で 60 代以下ぐらいの世代になるとテ形命令もさかんに見られ、ニュアンスは (20) - (21) のように依頼になる。

- (20) #ホッ[チ #カイ[テ
そちら側を持ってください(重いものを持ち上げる時)
- (21) [[ア]レマー、#コラエ[テ/[[コラエテ¹¹、 [[コンナニ [[セントイテ
あれまあ、許してね、こんなにしないでね
(高齢女性が高額の頂き物をした時のお礼など)

ジェンダー差はこの形式がよく使用される世代層ではあまり見られないが高齢層で使用される場合は女性に多い傾向が観察される。アクセントは動詞の活用型やモーラ数に関わらず、テが前部要素に高く後続する。

2.4 命令形命令と連用形命令の差異が示す文法化の過程

湖北北部方言における命令形命令と連用形命令の差異は、次のような例でも観察される。

- (22) [[ミテ]ミ / [[ミテミ]ヨ
見てみろ
- (23) [[ミテミ] / [[ミテミー
見てごらん

テ形複合動詞ミテミルの命令形命令は (22) [[ミテミ]ヨ、連用形命令は (23) [[ミテミーとなり、いずれも会話では語末モーラが脱落してそれぞれ[[ミテ]ミ、[[ミテミとなる形式がある。湖北北部方言では双方の形式に語末モーラの脱落前と脱落後が並存しているため、脱落後の形態の意味の差異が命令形命令と連用形命令の差異に基づくことが観察できる。しかし命令形接辞のヨが失われつつある湖北南部方言などでは、意味の差が明示されていた語末モーラが失われた結果、脱落後の形態のみを手がかりに語末のミを終助詞と捉え、これらの形式の意味の差異はイントネーションの差異であるとみなされることがある。脱落後の形態はそれぞれシテ+助詞として共時的には (24) - (25) のように分析することも可能である。

- (24) [[ミテ=ミ↓
見てみろ
- (25) [[ミテ=ミ↑
見てごらん

¹¹ 動詞コラエル「許す」は、低起・高起のアクセント型にゆれがある。

このことは、方言接辞のアクセントを含む形式を記述することによって、共時的には方言終助詞のイントネーションの差異として分析されうる形式に、助詞が文法化する前の複合動詞などの形式を提示し、意味の差異について根拠を与えられる可能性を示している。また湖北南部方言や京阪方言のように、当該方言では根拠となる形式が失われていても、湖北北部方言のように近隣方言に元になる形式が残存している場合があることも例証している。もとより古い形式が推定できることで全てを説明できる訳ではなく、当該の形式がどのような過程を経ていつごろ文法化したのか、音韻的な変化との関連はどうなっているのかなど個々の事例については個別に検証されなければならないが、方言終助詞の意味を分析する際には考慮すべきことのひとつといえるだろう。

2.5 待遇表現を含む命令

湖北方言は北部に限らず非常に待遇表現が豊かな方言であるが、命令形に限っては、基本的に待遇価が高い相手には使用されにくいこともあってそれほど多くの形式はない。また、共通語の影響を受けて最も大きく変化している部分でもあり、特に待遇価の高い相手に対して使用する形式は「テクダサイ」に取って代わられつつある。

(26) は 2.2 で見たトクレの命令形の形式に丁寧さを示す接辞のヤスが付いた形でほぼ最上級の待遇価を示し命令形であっても依頼を表す。(27) は動作主への敬意を示し連用形に後続する接辞のナール/ナハルの命令形であるが、連用形ではレが落ちてクナーレ/クナハレ、さらには接尾辞も短縮されたクナイの形式が使われる。これも丁寧な命令の形式で実質的には依頼を表す。なお京都市方言などで見られる「お入りやす」(森山 1999: 44) のような「お+連用形+やす」の形式は、湖北北部方言では定型化した挨拶表現を除きほぼ見られなくなっている。

(26) [[モー [[シモト]クレ [ヤ]ス

もう仕舞ってください(まだ仕事をしている人に終わることを促す)

(27) [[モー [[シモ]トク[ナ]ーレ/ [[シモ]トクナ[イ

もう仕舞ってください

(28) はシマウの未然形に待遇価が話者と同等か低く親しみのある相手に対する接尾辞の[ンス・[ヤンス (-j)ans-) ¹²の命令形 [[ヤ]ンセが後続した形式である。本稿で扱っている変種では語末音節にs/hの交替がある ¹³。(26) - (27) に見られる聞き手に対する敬意の標示はな

¹² この接辞は待遇表現だけでなくアスペクト、有生性、人称等を示し多機能であるが詳細については稿を改めたい。子音語幹動詞に接続する時には初頭子音の[j]が脱落する。

¹³ s/h の交替は湖北方言では一般的によくあるがこの変種では特に多く、全ての変種でこの接辞に交替が見られるわけではない。また一般的にはsが優勢であるがこの変種ではhが優勢である。

く、待遇価は低いが親しみを示し、家族など親疎の関係が親しい間柄であれば年長者などにも使える。

- (28) [[モー [[シマワ]ンセ/ [[シマワ]ンへ
もう仕舞いなさいな

2.6 アスペクト表現を含む命令

共通語のシテイロに当たる表現は湖北北部方言ではシテイ]ヨになるが、イは脱落した形がこの方言では標準であるため、命令形はシテ]ヨになる。

- (29) #シ[ズ]カニ [[シテ]ヨ
静かにしている
- (30) #シ[ズ]カニ [[シテテ
静かにしていて
- (31) #シ[ズ]カニ [[シト]レ
静かにしている

(29) は共通語では「静かにしている」であって「静かにしてよ」ではない。(30) は「静かにしていて」に当たる。また待遇表現とアスペクト等を標示する接尾辞トルを用いても(31) のように同様の命令になるが、この場合は(29) よりも聞き手の待遇価が下がり乱暴なニュアンスになり、この表現を用いるのはほぼ男性のみである。また大阪市方言に見られるような「じっとシトッテ」という形式は湖北北部方言には見られない。湖北方言ではトルは非常に待遇価が低く、近親者の待遇価を下げる聞き手尊敬表現か、動作主が子供や目下の間、ペットなどの場合にしか使えない。大阪市方言などのように聞き手に親しみをこめて気軽に使用する言葉ではないので、この接辞を使用してテ形命令に当たる柔らかい表現ができないためと考えられる。

このほか共通語のシテシマエに当たる形式は、命令形命令のシテマエと連用形命令のシテマイがあり、動詞のアクセント型に応じて以下のように現れる。

- (32) #ハヨ [[イッテ]マエ
早く行ってしまえ
- (33) #ハヨ [[イッテマイ
早く行ってしまってね
- (34) #ハヨ #クテ[マ]エ
早く食べてしまえ
- (35) #ハヨ #クテマ[イ
早く食べてしまってね

すなわち、動詞が高起式であれば命令形命令は (32) のように[[シテ]マエ、連用形命令は (33) のように[[シテマイに、低起式であれば命令形命令は (34) のように#シテ[マエ]、連用形命令は (35) のように#シテマ[イになる。

2.7 禁止の命令

湖北北部方言の最も基本的な禁止の命令は終止形+ナのスルナである。(36) のように終止形接辞のル -ru- はナ -na の直前で ru ~ n ~ φ の交替を示す。

- (36) [[アケ]ルナ / [[アケ]ンナ / [[アケ]ナ
開けるな

子音語根動詞では、-n- や (-φ-) - na が後続することは音節構造上できないため、五段活用では (37) の例に見られるように、原則としてそのような交替はない。ただし、語根末が r で終わる子音語根動詞については、(38)のように-n-na の形式をとることができる。語根末の r が接尾辞の -ru- と接続する際に接辞の初頭子音が脱落し、語根末の r が接辞の一部と再解釈されて交替が起きたと考えられる。

- (37) [[サガ]スナ / * [[サガ]ンナ / * [[サガ]ナ
探すな

- (38) [[サガ]ルナ / [[サガ]ンナ / * [[サガ]ナ
下がるな

2.5、2.6 で見た待遇表現やアスペクト表現を用いる場合も(39) - (41) のように接辞の終止形+ナの形式になる。

- (39) [[アケヤ]ンスナ
開けないで

- (40) [[ミテ]ルナ / [[ミテ]ンナ / [[ミテ]ナ
見ているな

- (41) [[アケテマ]ウナ
開けてしまうな

(42) のような動作の結果が継続する動詞の場合、シテルナの形式は動作そのものではなくその結果の継続を禁じる表現になる。「戸を [[アケテ]ルナ / [[アケテ]ンナ / [[アケテ]ナ」といえば戸を開けた結果戸が開いているという状態を禁じ、語用論的には寒いので戸を閉めろ、というような意味合いを持つ。共通語の「シテルンジャナイ」のように開けてしまったことを咎めるような意味を持たせることもできる。

- (42) [[アケテ]ルナ/[[アケテ]ンナ/[[アケテ]ナ
開けているな

強い禁止の命令には終止形に形式名詞のコト+ナランが後続するスルコトナランが用いられる。ただしこの形式は若年層では使われなくなっている。

- (43) #ミル[[コ]ト [[ナ]ランホン
決して見てはいけないぞ

コトナランが強い禁止であるのに対してコトイランは必要ないという意味を含む弱い禁止であり文脈によっては提案になる。こちらは比較的若年層でも使用されている。

- (44) #ミル[[コ]ト [[イ]ランホン
見るなよ～見なくてもいいよ

依頼に近い弱い禁止は「しないでいてくれ」という意味のセントイテクレ、セントイトクレになり、この用法ではイテのアスペクトマーカとしての意味は消失している。*センドクレのようにトイテを介さずにクレルに直接接続できる否定のテ形は観察されない。クレルをつけないテ形命令の形式も使用され、若年層ではクレルをつけない形式のほうが一般的になりつつある。

- (45) #ミントイ[テ]クレ/#ミントイ[テ]
見ないで

禁止命令に現れる接辞のシンタグマティックな関係を見ると (46) のような禁止命令文では否定辞は動詞とボイスなどを表す接辞の後に付く。禁止を表すナは文末に付き文全体にかかる。ただしムードを表す終助詞は後続することができる。

- (46) #ヨマ サ ン ト イ トクレ
読む 使役 否定 助詞 アスペクト 待遇・命令
読ませないでください

- (47) #ヨマ サ ンス ナ イヤ
読む 使役 待遇 禁止 終助詞
読ませるなよ

2.8 その他の命令の形式

この他、連用形+ヤレのシヤレはやや強い命令を示すが現在ではほぼ消滅したと見られる。先行研究に言及があるものとしては、井之口 (1952) に「連用禁止法」として連用形+ナで禁止を表す用法の記録があるが、これも現在では全く見られない。ただし、一段動詞については終止形のルが落ちた形と連用形は同形であるために形式だけでは見分けは付かない。井之口 (1952)、笥 (1962) のほか、現代の用例を集めた中山 (2012) などにも言及があるクダイはクレの意とされるが、少なくとも本稿で扱う変種では全く使われていない。これは地域的な偏りとも考えられ、湖北北部において使用している地域があるかどうかは今後の課題としたい。

3 湖北北部方言の命令文に付く終助詞

これまで述べてきたように、湖北北部方言の命令文では終助詞によってムードやジェンダーなどが標示されることがある。また実際の会話においては命令文の形態は終助詞を伴って現れることが非常に多い。本節では、湖北北部方言の命令文に付く終助詞とその性質を概観する。

3.1 湖北北部方言の命令文に付く終助詞

湖北方言の命令文に付く終助詞には以下の(48) – (52)に見られるものがある。

- (48) #ヨ[メ]イヤ
読め (ほぼ男性専用)
- (49) #ヨ[メ]ノ
読みなさい (ほぼ女性専用)
- (50) #ヨ[メ]ヨ
読めよ (命令を確認している)
- (51) #ヨ[メ]イネ/#ヨ[メ]イナ
読みなよ (強い奨励でまだ読んでいないのかというニュアンスもある)
- (52) #ヨミ[ヤ/#ヨミ[ナ
読んでね (提案を念押ししているニュアンス)

命令文の形態と命令文のほかにこれらの終助詞が付ける主な文のタイプを表4に示す。

表 4 : 命令文に後続する終助詞と先行できる文のタイプ

先行形式	例	イヤ	(イ)ノ	ヨ	イネ	イナ	ヤ↑ ¹⁴	ナ↑
命令形命令	読め	○	○	○	○	○	×	×
連用形命令	読み	×	×	×	×	○	○	○
テ形命令	読んで	×	×	×	×	○	○	○
シテクレ形	読んでくれ	○	○	○	○	○	×	×
シ ¹⁵ ヤンセ形	読まんせ	×	○	×	○	○	×	×
シトレ形	読んどれ	○	×	○	×	×	×	×
シテヨ形	読んでよ	○	○	○	○	○	×	×
スルナ形	読むな	○	○	○	○	○	×	×
セントイテ形	読まんとして	×	×	×	○	○	○	○
先行する文	例	イヤ	(イ)ノ	ヨ	イネ	イナ	ヤ↑	ナ↑
疑問文	読むか	○	○	×	○	○	×	○
反語文	読もか	○	○	×	○	○	×	×
意向形	読も ¹⁶	×	×	×	×	×	×	○
終止形宣言文	読む	×	×	×	×	×	×	○

表 4 に見るとおり、湖北北部方言の命令文に後続する終助詞には (1) 命令形命令に後続するタイプ (イヤ、(イ)ノ、ヨ)、(2) 連用形命令に後続するタイプ (ナ、ヤ)、(3) どちらにも後続するタイプ (イナ) の 3 種類がある。イネは判断が難しいところがあるがふるまいを見ると (イ)ノに近いタイプのものである。このうち、ジェンダー差を標示するのはイヤと (イ)ノで前者がほぼ男性のみ、後者がほぼ女性のみ分布になっている。この両者はシヤンセ形、シトレ形を除いては完全にふるまいが一致している。シヤンセ形、シトレ形については 2.5、2.6 でそれぞれ見たとおり、シヤンセ形は親しみを標示するため、やや高圧的なニュアンスがあるイヤと共起せず、シトレ形は非常に待遇価が低く乱暴なニュアンスを与えることから一般に女性の発話には見られることがない。従ってこの空白は社会的な理由によると考えられる。これ以外の終助詞ははっきりしたジェンダー差は示さない

¹⁴ イヤ、イナと紛らわしい形態を区別するため、上昇調のイントネーションを付す。

¹⁵ ただし、(-j)ans-)は五段活用では未然形に接続する。

¹⁶ この方言では意向形は基本的に短母音で現れる。

が、筆者の観察の限りではイネ、イナは女性に多くヨは男性に多い傾向がある。ただし、これらには共通語や京阪方言の影響もあると見られる。

次にこれらの終助詞の性質を概観する。

3.2 湖北北部方言の命令文に付く終助詞の性質

井上 (2002) は方言終助詞の文法的性質を記述する際のポイントとして使用可能な文タイプと他の終助詞との共起関係を指摘している。平叙文や疑問文などさまざまなタイプの文で使える終助詞は汎用性が高く命令文など使える文のタイプが特化されているものは汎用性が低い。この観点から湖北北部方言の終助詞を観察すると、まず表4の中ではヨ、ヤ↑だけが命令文にのみに接続し、汎用性の低い形式であるように見える。しかし、ヤ↑についてはそういえるが、ヨについては、上記の表には入っていない種々のムードを標示する平叙文の中にはヨが接続できる形式もあるため、必ずしも汎用性が低いとはいえない。ヨはイヤ、(イ)ノとともに命令形命令に後続するグループに属し、テ形、セントイテ形を含む連用形命令には後続できない。この点において、命令形命令に後続するイヤ、(イ)ノ、ヨと、連用形命令に接続するヤ、ナของกลุ่มははっきりとした対照をなし、相補分布している(社会言語学的な理由が考えられるシヤンセ形、シトレ形を除く)。このことから、たとえば連用形命令に後続するタイプの終助詞は連用形命令の形式とともにこの方言に後から導入されたのではないかということなどが推測される。明らかなことは、この方言には命令文に付く終助詞の中に命令形命令に後続するグループ、連用形命令に後続するグループ、両方に後続し中間的な性質を示すグループが存在するという点である。命令形命令に後続するグループは疑問文にも反語文にも接続できるという点では汎用性が高いが意向形や、終止形のみ宣言文には後続できない。ナは汎用性が高いが反語文には後続できない。ヤは、テ形を含む連用形命令の形式に後続するのみで、汎用性は低い。イヤ、イ(ノ)、ヨのグループにイネ、イナを加えた命令形に接続する終助詞は、ヨを除いて疑問文反語文にも接続し汎用性の高さを示すが、いずれも意向形や終止形の宣言文には接続できない。しかしこれらについても終止形に他の終助詞が付いた形式の宣言文には接続できる場合がある。

終助詞の汎用性の高さとその意味との関係について井上 (2006) は、たとえば共通語の「よ」のような極めて汎用性の高い終助詞の意味記述は比較的抽象的なものになり、これに対して方言終助詞には汎用性が低く具体的な心的態度を直接とらえる分析が中心となることを指摘している。井上 (2006) で示されたような命令文のみに後続できる方言終助詞などと比較すると、湖北北部方言に現れる終助詞はヤを除いて他の文タイプにも接続できることから汎用性が高いといえるが、2節で見たように、命令文であってもその形式に応じたさまざまな制約があり、文のタイプ以外に待遇価やジェンダーなど社会言語学的な状況もその分布に関連している。このような個々の終助詞の性質を詳しく記述するには、命令文以外の文を検討する必要があり、これについては稿を改めたい。また、湖北北部方言の命令文に後続する終助詞は、先に述べたとおりヤを除き他の終助詞と共起が可能で命令文

に後続する形式が文末に位置する。どの終助詞と共起するかは終助詞によって異なり、これについても今後の課題としたい。

4 結論と今後の課題

本稿では、滋賀県湖北方言の命令形式について形態音韻的な記述を行った。2 節では命令形命令と連用形命令の差異をはじめこの方言で生産的な形式について詳しく記述し、待遇表現やアスペクト形式を含む命令、禁止命令など命令文に現れる形式を概観した。3 節では命令形に後続する終助詞を観察し、終助詞の中には命令形に後続するグループと連用形命令に後続するグループ、いずれにも接続するグループがあることを明らかにした。今後の課題はそれぞれの形式の意味的な記述をさらに詳細に記述し分析することである。3 節で扱った終助詞については命令文以外の文に付く場合と比較対照することによってそれぞれの性質を明らかにしなければならない。また、湖北北部方言のうち本稿で扱った変種は一部地域に限られているため、引き続き方言/変種の調査を行う必要がある。さらにこの方言の体系的な記述に向けて研究を進めたい。

参考文献

- 井上優 (2002) 「方言終助詞の記述研究のために」『日本語学』21 (2): 48-57.
- (2006) 「第4章モダリティ」小林隆・佐々木冠・渋谷勝己・工藤真由美・井上優・日高水穂『シリーズ方言学2 方言の文法』137-179. 東京: 岩波書店
- 井之口有一 (1952) 『滋賀県言語の調査と対策: 方言調査編』彦根: 井之口有一 (私家版)
- 寛大城 (1962) 「滋賀県方言」楳垣実 (編) (1962) 『近畿方言の総合的研究』159-217. 東京: 三省堂
- 中山敬一 (2012) 『ええほん 滋賀の方言手控え帖』彦根: サンライズ出版
- 牧野由紀子 (2009) 「大阪方言の命令形に後接する終助詞「ヤ・ナ」」『阪大日本語研究』21: 79-108.
- 宮治弘明 (1987) 「近畿方言における待遇表現運用上の一特質」『国語学』151: 38-57.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版』東京: くろしお出版
- 森山卓郎 (1999) 「命令表現とそのイントネーション—京都市方言を中心に—」音声文法研究会 (編) 『文法と音声II』39-55. 東京: くろしお出版
- 脇坂美和子 (2015) 「滋賀県湖北方言の動詞に付く助詞と接辞のアクセントについて」『京都大学言語学研究』34: 69-88.